

雛がたり

泉鏡花

青空文庫

ひな 雛——女めおと夫びな雛は言うもさらなり。桜さくら雛びな、柳やなぎ雛びな、花菜はななの雛びな、桃はなびなの花はな雛びな、白しろと

緋ひと、紫ゆかりの色のすみれ葷びな雛ひな。鄙ひなには、つくし、鼓草たんぽぽの雛ひな。相合傘あいがさの春雨はるさめ雛ひな。小波ささなみ軽かろ

く袖そでで漕こぐ浅妻船あさづまぶねの調しらべの雛ひな。五人ごにん囃子ばやし、官女かんじょたち。ただあの狎ちんひきというのだけは形しな

も品しなもなくもがな。紙かみ雛ひな、島しまの雛ひな、豆まめ雛ひな、いちもん雛ひなと数かずうるさえ、しおらしく

可なつかし懐なつかしい。

黒くろ棚だな、御厨子みずし、三棚みつだの堆なうきは、われら町家ちやうかの雛壇ひなだんには些ちと打上うちあがり過ぎるであ

ろう。箆たんす筒ながもち、長持ながもち、挟箱はさみばこ、金高きんたか蒔まき絵え、銀金具ぎんかなぐ。小指こさきぐらいな抽斗ひきだしを開ひらけると、

中なかが紅あかいのも美しい。一いっ双そうの屏風びやうぶの絵えは、むら消えの雪ゆきの小松こまつに丹頂たんちやうの鶴つる、雛ひなづ

鶴つる。一つは曲水きよくすいの群青ぐんじやうに桃ももの盃さかずき、絵雪洞えぼんほり、桃もものような灯ひを点ともす。……ちよつ

と風情ふぜいに舞扇まいおおぎ。

白しろ酒さけ入れたは、ぎやまんに、柳やなぎさくらの透模すきも様よう。さて、お肴さかなには何なによけん、あわび、

さだえか、かせよけん、と榮螺蛤さざなまぐりが唄うたになり、皿しらの縁うちに浮ういて出る。白魚しろうおよし、小鯛こだいよ

し、緋ひの毛氈もうせんにに肖あやつかわしいのは柳鰈やなぎがれいというのがある。業平なりひらしじみ蛭こまちえび、小町蝦こまちえび、飯い

鮎いだしも憎にくからず。どれも小さなほど愛あいらしく、器うつわもいずれ可愛かわいいほど風情ふぜいがあつて、そ

の鯛、鰈の並んだ処は、雛壇の奥さながら、竜宮を視るおもい。

(もしもし何処で見た雛なんですえ。)

いや、實際六、七歳ぐらいの時に覚えている。母親の雛を思うと、遙かに竜宮の、幻の
ような気がしてならぬ。

ふる郷も、山の彼方に遠い。

いずれ、金目のものではあるまいけれども、紅糸で底を結えた手遊の猪口や、金
米糖の壺一つも、馬で抱き、駕籠で抱えて、長い旅路を江戸から持つて行つたと思えば、
千代紙の小箱に入つた南京砂も、雛の前では紅玉である、緑珠である、皆敷
妙の玉である。

北の国の三月は、まだ雪が消えないから、節句は四月にしたらしい。冬籠の窓が開
いて、軒、廂の雪がこいが除れると、北風に轟々と鳴通した荒海の浪の響も、春風の
音にかわつて、梅、桜、椿、山吹、桃も李も一斉に開いて、女たちの眉、唇、裾八
口の色も皆花のように、はらりと咲く。羽子も手鞠もこの頃から。で、追羽子の音、手
鞠の音、唄の声々。

………ついで落いて、裁形、袖形、御手に、蝶や………花。………

かかる折から、柳、桜、緋桃ひももの小路こみちを、麗うららかな日に徐そつと通る、と霞かすみを彩いろどる日光ひぎしの裡うちに、何処どこともなく雛ひなの影、人形ひとがたの影かげが徜徉さまよう、……

朧おぼろ夜よには裳もの紅くれない、袖そでの萌黄もえぎが、色いろに出て遊あそぶであらう。

——もうお雛様がお急いそぎ。

と細ほい段たんの緋毛氈ひもうせん。こここで桐きりの箱はこも可懐なつかしそうさうに抱だきしめるようように持もつて出でて、指蓋さしぶたを、すつと引ひくと、吉野紙よしのがみの霞かすみの中なかに、お雛様ひなさまとお雛様ひなさまが、紅梅こうばい白梅はくばいの面影おもかげに、ほんのりと出でて、口許くちもとに莞爾にっことし給たまう。唯と見みて、嬉うれしそうさうに膝ひざに据すえて、熟じつと視みながら、黄金こがねの冠かんむりは紫むらさき紐ひも、玉たまの簪かんざしの朱しゆの紐ひもを結ゆい参まらす時ときの、あの、若い母ははのその時ときの、面影おもかげが忘れわられない。

そんなら孝行こうぎやうをすれば可いいのに——

鼠ねらの番ばんでもする事ことか。唯ただ台所だいじやうで音ねのする、煎豆いりまめの香かに小鼻こはなを怒いからせ、牡丹ぼたんの有平糖あるへいとうを狙ねらう事こと、毒どくのある胡蝶こちょうに似にたりで、立姿たちすがたの官女かんじよが捧ささげた長柄ながえを抜ぬいては叱しかられる、お囃子はやしの侍さむらい烏帽子えぼうしをコツンと突ついて、また叱しかられる。

ここに、小さな唐草からくさ蒔絵まきえの車くるまがあつた。おなじ蒔絵まきえの台たいを離なして、轆ながえをそのままに、後うしろから押おすと、少し軋きしんで毛氈もうせんの上うへを這すべる。それが咲さみだみだ乱みだれた桜さくらの枝えだを伝つたうようようで、また、

くれない
紅の霞の浪を漕ぐような。……そして、少しその軋む音は、幽かすかに、キリリ、と一種の微妙なる音楽であった。仲よしの小鳥が嘴くちばしを接す時、齒はえぎわの生際の嬰あかんぼ児こが、軽焼かるやきをカリリと噛む時、耳を澄すますと、ふとこんな音がするかと思う、——話は違うが、（ろうたけたるもの）として、（色白き児この母いもぢくいたる）枕まくらの草紙そうじは憎い事を言った。

わびしかるべき莖くくだちの浸ひたしもの、わけぎのぬたも蒔絵まきゑの中。惣菜そうざいものの蜷しじみさえ、雛の御前おまえに罷まかんづ出れば、黒小袖くろこそで、浅葱あさぎの襟えり。海のもの、山のもの。筍たかなの膚なはだも美少年。どれも、食くものという形でなく、菜の葉はに留とまれ蝶ちようひとと齊あしく、弥生やよいの春のともだちに見える。

……

そでがた おしえぎよく はし
袖形の押絵細工の箸さしから、銀の振出し、という華奢きゃしゃなもので、小鯛こだいには骨が多い、
やなぎがれい ごちそう
柳 鱒なまこの御馳走を思出すと、ああ、酒と煙草たばこは、さるにても極こりが悪い。

其角句きかくあり。——もどかしや雛ひなに対して小盃こさかずき。

よ。
あの白酒を、ちよつと唇につけた処ところは、乳ちちの味がしはしないかと思う……ちよつとです

——構くわらず注つぎねえ。

なんかで、がぶがぶ遣やつちや話にならない。

金岡かなおかの萩はぎの馬ば、飛驒ひだの工匠たくみの童りゆうまでもなく、電燈でんとうを消して、雪洞ぼんぼりの影に見参らず雛ひなの顔は、實際じつじ、唯瞻とみれば瞬またたきして、やがて打微笑うちほほえむ。人の悪い官女のじろりと横目で見
るのがある。——壇の下に寝ていると、雛ひなの話はなし声こゑが聞える、と小児こどもの時に聞いたのを、
私は今も疑いたくない。

で、家かちゆう中ちゆうが寝静ねじままると、何処どこか一ヶ所、小屏風こびょうぶが、鶴の羽に桃を敷いて、すつと廻まわ
ろうも知れぬ。……御睦おんむつましきにつけても、壇に、余り人形の数の多いのは風情ふぜいがな
らう。

但し、多いにも、少いにも、今私は、雛らしいものを殆ど持たぬ。母が大事にしたのは、
母がなくなつて後のち、町に大火があつて皆焼けたのである。一度持出したとも聞くが、混雑まぎ
に紛まぎれて行方を知らない。あれほど気を入れていたのであるから、大方は例の車に乗つて、
雛たち、火を免れたのであろう、と思つている。

その後こういう事があつた。

なおそれから十二、三年を過ぎてである。

逗子ずしにいた時、静岡の町の光景さまが見たくつて、三月の中なかばと思う。一度彼処あそこへ旅をした。
浅間せんげんの社やしろで、釜かまで甘酒あまじゆを売る茶店へ休んだ時、鳩つばと一いっしょ所に日南ひなたぼっこをする婆おばさんに、

阿部川の川原で、桜の頃は土地の人が、毛氈に重詰もので、花の酒宴をする、と言うのを聞いた。——阿部川の道を訊ねたについてである。——都路の唄につけても、此処を府中と覚えた身には、静岡へ来て阿部川餅を知らないでは済まぬ気がする。これを、おかしなものゝ異名だぞと思われては困る。確かに、豆粉をまぶした餅である。

賤機山、浅間を吹降す風の強い、寒い日で、寂しい屋敷町を抜けたり、大川の堤防を伝つたりして阿部川の橋の袂へ出て、俵は一軒の餅屋へ入った。

色白で、赤い半襟をした、人柄な島田の娘が唯一人で店にいた。

——これが、名代の阿部川だね、一盆おくれ。——

と精々喜多八の気分を漾わせて、突出し店の硝子戸の中に飾った、五つばかり装つてある朱の盆へ、突如立つて手を掛けると、娘が、まあ、と言った。

——あら、看板ですわ——

いや、正のものの膝栗毛で、聊か気分なるものを漾わせ過ぎた形がある。が、此処で早速頬張つて、吸子の手酌で飲つた処は、我ながら頼母しい。

ふと小用場を借りたくなつた。

中戸を開けて、土間をずつと奥へ、という娘さんの指図に任せて、古くて大きいその中

戸を開けると、妙な建方たてかた、すぐに壁で、壁の窓からむこう土間の台所が見えながら、穴を抜けたように鉤かぎの手に一つ曲つて、暗い処をふつと出ると、上あがり 櫃かまちに縁えんがついた、吃びつくり驚するほど広々とした茶の間。大々だいたいと炬いろりが切つてある。見事な事は、大名の一ひとたてぐらいは、楽に休めたるうと思う。薄暗い、古畳。寂せきとして人ひと気がない。……猫もおらぬ。炉ろに火の気もなく、茶釜も見えぬ。

遠くで、内井戸うちいどの水の音が水底みなそこへ響いてポタン、と鳴る。不思議に風が留やんで寂ひっそり寞そした。

見上げた破風口はぶぐちは峠ほど高し、とぼんと野原へ出たような気がして、縁えんに添そいつつ中土なか間どまを、囲炉裡いろりの前を向うへ通ると、桃もも桜さくら澆くらぼつと輝くばかり、五壇ごだん一面の緋毛氈ひもうせん、やがて四畳半いっぱいを充満みみに雛、人形の数々。

ふとその飾った形も姿も、昔の故郷の雛によく肖にた、と思うと、どの顔も、それよりは蒼あおしろ白しろくて、衣きぬも冠かむりも古雛ふるびなの、丈たけが二倍ほど大きかった。

薄暗い白昼まひるの影が一つ一つに皆映うつる。

背後うしろの古ふる襖ふすまが半ば開いて、奥にも一つ見える小座敷に、また五壇の雛がある。不思議や、蒔絵まきえの車、雛たちも、それこそ寸分すんぶん違たがわない古郷ふるさとのそれに似た、と思わず伸のびあ

上りながら、ふと心づくると、前の雛壇におわするのが、いずれも尋常の形でない。雛は両方さしむかい、官女たちは、横顔やら、俯向いたの。お雛子はぐるり、と寄って、鼓の調糸を緊めたり、解いたり、御殿火鉢も楽屋の光景。私は吃驚して飛退いた。

敷居の外の、苔の生えた内井戸には、いま汲んだような釣瓶の雫、——背戸は桃もただ枝の中に、真黄色に咲いたのは連翹の花であった。

帰りがけに密と通ると、何事もない。襖の奥に雛はなくて、前の壇のも、烏帽子一つ位置のかわつたのは見えなかつた。——この時に慄然とした。

風はそのまま留んでいる。広い河原に霞が流れた。渡れば鞠子の宿と聞く……梅、若菜の匂にも聞える。少し渡つて見よう。橋詰の、あの大樹の柳の枝のすらすらと浅翠した下を通ると、樹の根に一枚、緋の毛氈を敷いて、四隅を美しい河原の石で圧えてあつた。雛市が立つらしい、が、絵合の貝一つ、誰もおらぬ。唯、二、三町春の真昼に、人通りが一人もない。何故か憚られて、手を触れても見なかつた。緋の毛氈は、何処のか座敷から柳の梢を倒に映る雛壇の影かも知れない。夢を見るように、橋へかかると、これも白い虹が来て 群青の水を飲むようであつた。あれあれ雀が飛ぶように、おさえ

の端はしの石がころころと動くと、柔やわらかい風に毛氈わたを捲まいて、ひらひらと柳しだえだの下枝からに搦からむ。
 私は愕然おどろとして火を思った。

何処どこともなしに、キリキリりと、軋きしる轆ながえの車ひびきの響きこ。

鞠子まりこは霞なむ長橋ながはしの阿部川あべがわの橋はしの板いを、あっちこっち、ちらちらと陽炎かげろうが遊あそんでいる。
 時に蒼空あおぞらに富士を見た。

若き娘さちに幸さいあれと、餅屋もちやの前まへを通過とおりすぎつつ、

——若い衆しゆ、綺麗きれいな娘むすこさんだね、いい婿むすこさんが持もたせたいね——

——ええ、餅屋もちやの婿むすこさんは知りませんが、向う側むかひのあの長い堀ほり、それ、柳やなぎのわきの裏門うらかどのありますお邸やしきは、……旦那だんな、大財産家だいざいさんかでございましてな。つい近い頃ころ、東京とうきやうから、それはそれは美しい奥さんが見みえましたよ——

何なにとこうした時は、見ぬ恋こひにも憧憬あこがれよう。

欲ほしいのは——もしか出来たら——修にせむら紫むらさきの源氏げんじ雛ひな、姿くも国貞くにさだの錦にしき絵えぐらいな、
 花桐はななぎりを第一だいいちに、藤ふじの方かた、紫むらさき、黄昏たそがれ、桂木かつらぎ、桂木かつらぎは人も知しつた朧月夜おぼろづきよの事ことである。

照ありもせず、くもりも果はてぬ春はるの夜よの……

この辺ちっは些ちと酔よつてるでしょう。

青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集 川村二郎編」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二七卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月

初出：「新小説」

1917年（大正6年）3月

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月30日公開

2005年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雛がたり

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>